



川崎歴史ガイド

東海道と 大師道



東海道と大師道



●多摩川から臨む川崎の風景も、長い歴史とともに様々に移り変わってきた。

東海道。江戸から京都まで、道のりは百二十五里二十町、およそ五百二十キロ。

天下統一を成し遂げた徳川家康により、先ず始められたのが街道の整備でした。五街道、とりわけ東海道は特に重視され、慶長6（1601）年、いちちはやく伝馬制が敷かれます。この時既に発達していた多くの集落は、そのまま宿駅として指定され、その後、川崎宿のように新しく「町だて」をしてから宿となったものをあわせ、東海道に五十三宿が整うのは、ちょうど参勤交代制が確立する寛永12（1635）年頃のことでした。

この東海道を大半の大名行列が通り、それにつれて多くの物資が行き交い、東西の文化交流が活発になったのです。



東海道川崎宿は、他の宿より遅れて元和9（1623）年につくられた宿です。今の小川町あたりから六郷橋まで、小土呂、砂子、新宿、久根崎の四町で構成されていました。東海道を上る旅人の昼食、休憩地として、また下る旅人には六郷の渡しを控えた最後の宿泊地として賑わった宿場でした。

東海道が一層活況を呈するのは、江戸時代も後期、一般庶民の中に経済的ゆとりもでき、遊山や参詣のための往来が頻繁になってからのことでした。川崎宿の旅籠や茶店など商店の数が激増したのも、やはりそれ以降、幕末までの時代です。

川崎宿が賑わったもう一つの大きな理由として厄除けで知られる川崎大師の存在があります。古くから庶民の信仰を集めた川崎大師は、とくに、十一代将軍家齊が文化10（1813）年、 공식参拝して以来、將軍家の帰依を受け、一層広く信仰されるようになりました。日帰り参詣のできる関東屈指の霊場として、川崎大師には江戸からの参詣客が絶えませんでした。こうして人々は、川崎宿と、これに続く大師道を賑わしたのです。

江戸と京都を結ぶ東海道。その宿駅として、また同時に大師参詣の拠点として栄えた川崎宿でした。



●六郷を渡る陸蒸気。列車時刻と運賃表が見どころ。

川崎宿と明治維新

「気」が開通。その一カ月後、「川崎駅」がほぼ現在の位置に完成。東海道五十三次川崎宿の「宿場」としての時代は、名実ともに終わりを告げたのでした。

当時の様子を「川崎誌考」という本は次のように書いています。

「鉄道開通以来、全く並外れの片田舎に成り下がってしまった。時代の進歩と発展に遅れること益々遠く、当時の戸数は僅かに七百戸……」。

川崎が工業都市として新たな道を歩み出す明治末頃まで、こんな状態が続いたのです。

くつも伝わっています。

川崎宿は再三の火災からも立直り発展しますが、他方、多くの古文書、記録類が失われました。わずかに残ったものも、その後の震災や戦災で滅失してしまっています。

現在、川崎宿の歴史的資料がほとんどないのは、こうした度重なる災禍によるのです。

宝暦十一年の大火

火事と喧嘩は江戸の華。川のこちら側、川崎宿も劣らず火事の多い町でした。

とりわけ、宝暦11(1761)年の火事は、川崎宿二百年のなかで最大のものでした。小土呂町から出火し、上は宿場のはずれから、下は六郷渡し場まで、川崎宿の町並は東海道に沿ってほぼ一軒残らず類焼。町並からずつと奥まっていた一行寺や宗三寺まで類焼したので、いかに広範囲に及ぶ火事であつたかがわかります。

このほか、鎮守山王社(現稲毛神社)の屋根の葺き替え工事のため、たまた

明治41年当時の川崎駅

●明治の川崎ステーション。面影は今も。



●火消しの心意気。



東海道
五十三次之内
川崎

廣重

●広重の東海道五十三次之内川崎六郷渡舟。今から150年前の風景。

新宿という町

東海道川崎宿を構成していた四町のうち、「砂子」は今も地名として残り、「小土呂」と「久根崎」はわずかながら、バス停や交差点にその名を留めています。しかし「新宿」という、かつて大層賑った町の名残りを見出すことは困難になってしまいました。

新宿町については地名の由来がいろいろ考えられています。東海道に川崎宿を設ける際、計画的に「町だて」が行われました。街道沿いを区画整理し、屋敷割りをして、そこへ住民を移動させたのです。その時、砂子と久根崎の間に新たにできた町並を新宿と呼んだ、

という説。あるいは、東京の新宿が甲

州街道に新しく設けられた宿という意味だったのと同様、東海道に他の宿場より遅れてできた川崎宿は「新宿」と呼ばれた。後に中心部だけがそう呼ばれるようになった、という説などです。

いずれにしても新宿は、問屋場、本陣など公的機関が置かれ、川崎宿の中心でした。

現在の本町一帯がほぼ当時の新宿に当ります。



●奈良茶飯が評判で賑う万年屋。



●宗三寺の六地藏。このあたりも新宿だった。

六郷の渡しと旅籠街

江戸時代の初め、家康によって架けられた六郷大橋は、千住、両国と並び江戸の三大大橋と呼ばれたほど立派なものでした。しかし、洪水のたびに流され、ついに幕府は橋をあきらめてしまします。その後は、広重の絵にあるような渡し舟の時代が、実に二百年ものあいだ続くわけです。

その六郷の渡しを越えると川崎宿。街道は行き交う人馬で賑わっていました。宿場の全盛時代といえる幕末の記録では、旅籠六二軒のほか、八百屋、下駄屋、鍛冶屋、提灯屋など合計三六八軒の家々が街道に面して並んでいたとさ

れています（文久3（1863）年の宿図から）。その頃のはやり唄に「川崎宿で

名高い家は、万年、新田屋、会津屋、藤屋、小土呂じや小宮、……」など

ありますが、とりわけ有名だったのは万年屋です。渡し場に近いという場所の良さと商売上手で大繁盛。東海道中膝栗毛の弥次さん喜多さんもここに腰を下ろし、名物の奈良茶飯をかつこんでいます。

万年屋のあったあたりを今、国道15号線が通っています。

長十郎梨のふるさと

多摩川を汽車で渡るや梨の花 子規
江戸時代、大師河原で始まった梨づくりは、明治になるとますます盛んになりました。近代工業が始まる以前、多摩川を渡って川崎に入ると、先ず目につくのは梨畑。季節には梨の白い花が堤に沿ってどこまでも続いていたのです。

明治の中頃には品種改良も進み、実に二十種以上の梨がつくられていたといひます。中でも画期的な品種をつくり出したのは、大師河原村の当麻辰次郎でした。当時蔓延した黒星病でこのあたりの梨が大被害を受けた際、す

に彼が改良に成功していた新種だけは、ほとんど被害を免れたのです。病害に強いうえ、甘味があり、収穫も多いとあって、一躍注目を浴びることになったこの梨に、彼は、自分の屋号をとって「長十郎」と名づけたのでした。やがて全国に広まり、今なお人気の高い長十郎梨は、こうして川崎の大師河原村から生まれたのでした。



●若宮八幡宮の薪能。



●万年横丁に立っていた道標。



●大正14年に完成した六郷橋。



●多摩川に沿ってどこまでも続いていた梨畑。



●現在の競馬場遠景。



●川崎の沖縄民俗芸能。昭和29年、県の無形文化財に。

万年横丁から大師へ

渡し舟をおりて川崎宿に入り、少し進んで左に折れると、そこは万年横丁。万年横丁の名は、その頃有名だった万年屋に近かったことからつけられたものでしょう。横丁を流れる堀に万年橋という小さな橋がかかっていたことも記録されています。

万年横丁の入口には、現在川崎大師の境内にある「從是弘法大師江之道」と彫られた石の道標が立っていて、人々はここを抜け、医王寺、若宮八幡經由で大師に参詣したのです。道々、白酒を飲んだり饅頭を食べたりするのを楽しみの一つ。縁日ともなると、沿

道の農家が戸板にみやげ物や果物を並べて売る光景が見られたものでした。

さて、明治21年に大師新道がつくられ、その道を大師線が走るようになると、旧道の様子も変わり、やがて静かな里の道となつてさびれていきます。旧道にあつた家々が新道の方に移つて店を出すようになり、その跡地は次第に梨や桃の畑へと変わつていったのでした。



富士紡績と競馬場

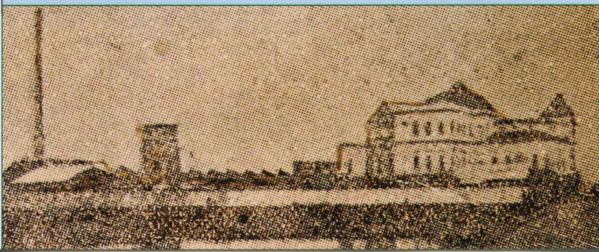
三層煉瓦造り化粧建て。そんなシャレたメインスタンドをもった明治末期の川崎競馬場。建築の見事なこと東洋一と言われたほどでした。ところが、競馬の過熱が社会問題となり、明治41年、政府が馬券発売禁止令を出すに至つて、川崎競馬場も廃止。完成後わずか二年、開催日数正味十五日間。それにしては立派すぎる競馬場でした。

その跡地に、これもまた東洋一の紡績工場を建てたのが富士紡績。完全操業を始めた大正4年当時、二千人を越える従業員の多くは沖縄など九州方面からの若い女性でした。今川崎の貴重

な文化財となつている沖縄民俗芸能は、この時代以来川崎に定住した人々により受け継がれ、発展してきたものです。低賃金で働く女工たちの仕事は、昼夜二交替、十二時間勤務というつらいものでした。労働争議史に残る「煙突男事件」は、四百人余りの大量解雇を契機として起こつたもので、世界恐慌下の昭和5年、この富士紡での出来事でした。

●明治の競馬場のメインスタンドはそのまま富士紡の事務所に。

- 大正5年頃の工員給料
- 富士瓦斯紡績＝男30銭、女50～60銭、労働1日12時間昼夜2交替
- 東京電気＝男熟練者2円、女50銭
- 日本銅管＝男80銭～1円
- 明治製糖＝男50～60銭、女30銭位、男は農業労働者が大部分、女は男工の妻
- 鈴木商店＝平均60銭
- 麻真田製造＝管巻20銭、織女30銭（労働時間は普通10時間）
- 煉瓦製造所＝男60銭位



●若宮八幡宮と隣り合う金山神社。





●原盤がズラリと並ぶコロムビア川崎工場の倉庫。

工場誘致に力を注ぎ、後に初代川崎市長となった石井泰助の墓がある徳泉寺の前を過ぎ、右に競馬場を見ながら川崎大師へ向かうと、すぐに大きなT字路に出ます。信号機の下には「久根崎」という表示があります。

久根崎は、六郷の渡し場から、多摩川の上流・下流に沿って広がる細長い地域の地名でした。川崎宿ができたとき、その中に組み入れられ、宿場の仕事を

を受け持った町です。河原にできた集落だけに、安定した耕地も少く、農業は振るいませんでした。しかし、近代

に入ると、逆に久根崎あたりは、水運その他の条件から工業用地として着目されます。やがて、日本コロムビアをはじめとして、近代工場が次々と多摩川沿いに建設されていったのです。

ところで、「久根崎」は、大正13年の市制施行を境に町名としては使われなくなり、今は交差点やバス停の名にその名残りを留めるばかりです。

消えた地名

久根崎



●創立70周年記念のレコードには創業当時の工場全景が。

日本に初めて蓄音機が輸入されたのは、明治10年。エジソンの発明からわずか一年後のことです。もともと蓄音機が商品として一般に出まわるのは、それから約二十年後で、それも輸入ものに限られていました。当時「魔法の小箱」と呼ばれて珍重された蓄音機は、横浜の輸入商を通して日本に入っていました。この輸入商がやがて「日米蓄音機製造株式会社」（日本蓄音機商會に合併され、現在日本コロムビア）を設立し、日本におけるレコード製造が開始されるのです。

久根崎に川崎工場が竣工し、操業を

レコード製造の始まり

始めたのは明治42年。川崎に進出した近代産業の草分け的存在でした。

大正3年の「カチューシャの歌」に始まって、古賀メロデー、美空ひばりのヒット曲、川崎が生んだ詩人、佐藤惣之助作詞による「人生劇場」。歌謡曲、邦楽、クラシック音楽など心に残る名曲が、数えきれないほどの工場から全国に送り出されていったのです。



●多摩川の水運に着目しての工場進出。





●医王寺のつつじは樹齢およそ100年。

久根崎の交差点近くにある福嶋鐵工所は、このあたりにある企業の中でも特に古い歴史をもっています。初代は、幕末の動乱期に、刀剣類や馬具等の武装品を製造していた江戸の鍛冶職人でした。

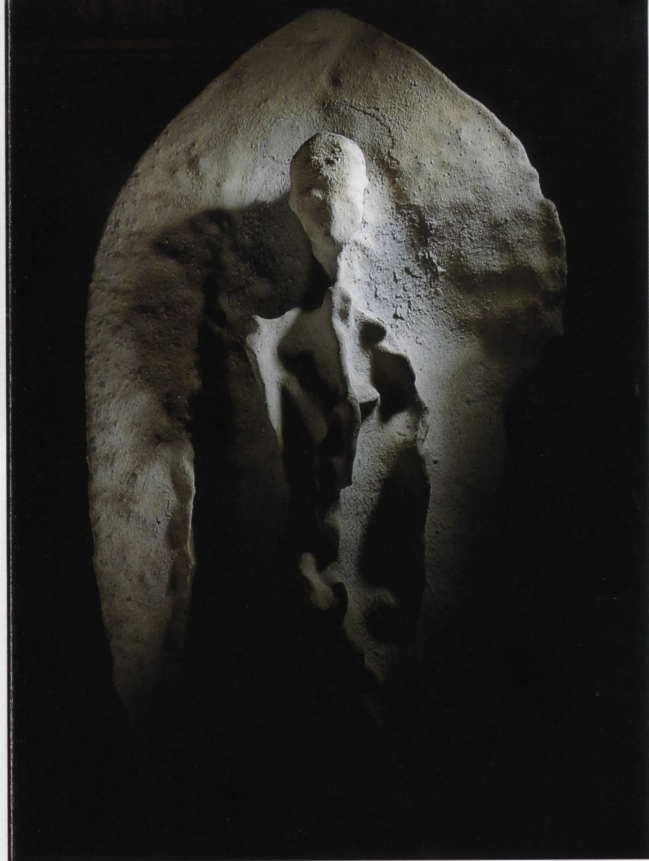
鍛冶の仕事も明治維新を境として、大きく変化します。この初代が川崎に移って鍛冶業を始めたのは明治元年。当時、羽田や川崎大師付近では木造船づくりが盛んとなり、そのための舟釘や錠等のおびただしい需要をまかなう仕事が続いたようです。

吹きを動かし、火花を散らしながら

“鈍音”から近代工場へ

鉄を鍛える鍛冶の仕事は、いかにもいさましい反面、周囲に響く鈍音が悩みでした。そのために当初東海道沿いで創業したものの転々と所を変え、昭和10年ようやく四回目にして現在地に落ち着いたのです。

進出してきた周囲の大工場の中にあつて、福嶋鐵工所は、地元で起こり近代的工場へと発展した稀な例です。



●塩どけ地蔵。

昔々、医王寺の池に棲む魚や力二たちは、寺で撞く朝夕の鐘の音に守られていた。音に驚き、天敵の白鷺が寄りつかなかったからだ。ある夜、近くに火事が起こった。本堂は燃え、炎は鐘楼までものみ込もうとしていた。その時、池の力二たちはそくそくと鐘楼に登り、焼かれても焼かれても泡を吹き出して鐘楼を守り通した。翌朝、鐘楼だけが残り、まわりには何百という力二の死骸が…。やがて、力二たちを供養する鐘の音が荒涼たる焼野原に響き、この時から医王寺の力二は背中が赤くなつたという。

医王寺と二つの伝説

医王寺には、この話にちなむ鐘楼と池が、見事なつつじに囲まれて今もあります。また、境内の「塩どけ地蔵」は、もと大師道にあったといわれ、これにも伝説があります。

昔、瘡（できもの）がはやったとき、苦しんだ村人が地蔵のからだに塩をこすりつけて祈ったところ、すつかりよくなった。人々は次々に瘡をこすりつけた。やがて村から瘡の話も消えた頃、地蔵のからだは塩でとけ、今のようになつたという。



●鍛冶業時代の金床。

運河と水門と港町

多摩川の上流、青梅^{おうめ}地方で切り出された木材は、筏^{いかだ}に組まれ、川を下って川崎や江戸へ。多摩川は古くから水運に利用されてきました。

明治以降、河口付近に建設された各工場も、原材料の多くを多摩川から運び入れていたのです。

工業用地拡大のため、水路網をつくり上げようとしたのが川崎市の運河建設計画でした。これに基づき、大正15年から川崎河港の建設が進められ、昭和3年にはこの河港のための水門も完成します。しかしここで、財政事情の悪化などから計画は中断。今に残る水

門は当時のままで、その立派さから運河計画への意気込みを感じとることが出来ます。また、水門の上につけられた大きな飾りには、梨やぶどう、桃などがあしらわれ、古くはこのあたりがそれら果物の一大産地であったことを偲^{しの}ばせています。なお、この水門は産業遺産として平成10年9月に国の有形文化財に登録されました。

舟着場としての歴史をもつこの一帯、今は港町と呼ばれています。

大師道・観音道

万年横丁から旧大師道を通っていくと、川崎大師までのほぼ中間地点が昔、三叉路になっていて、そこに「左大師道、右観音道」と刻まれた石の道標^{みちしるし}が立っていました。大師参詣客は、左の道を若宮八幡経由で大師へ向かったわけです。

右へ折れる「観音道」とは、石観音への道という意味です。本尊の如意輪^{にぎいりん}観音が石像であることからその名がついたという石観音。かつては大師参詣客の多くが、こちらにもお詣りしたとい

います。境内にある「石観音六句碑」は、延享4（1747）年のもので、県内



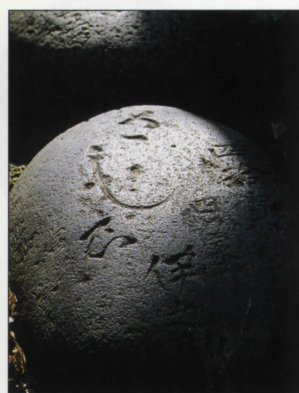
●江戸名所図会の石観音。



●母なる川、多摩川。

で最も古い句碑。また、「独吟万句詠草塚」という珍しい碑もあります。一晩あるいは一日のうちに詠んだ句の数を競う矢数独吟^{やかずどくごん}を行った地元俳人の記念碑です。

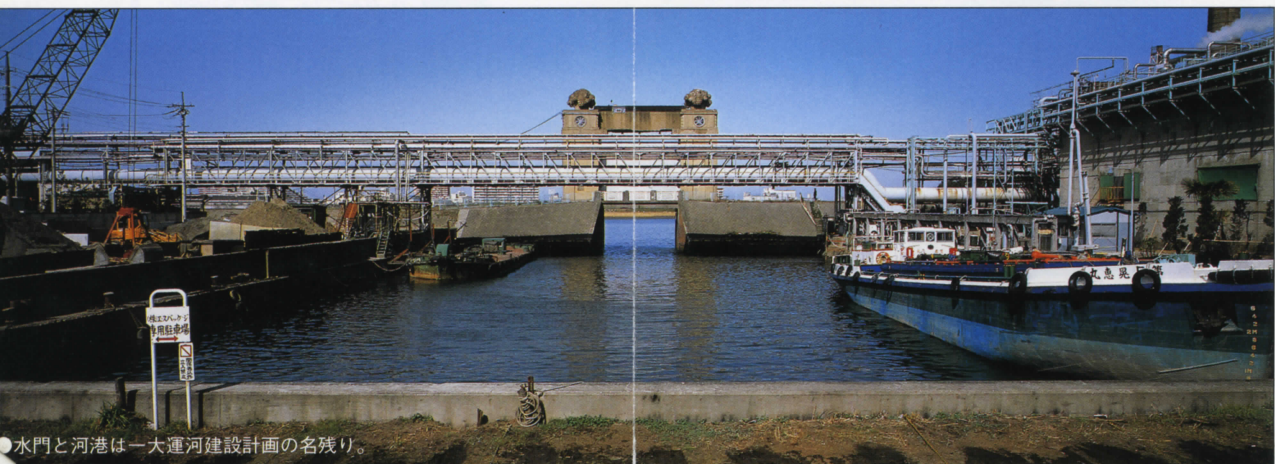
当時、海に近く景勝の地だった石観音は、こうした文人たちの句会や集まりの場ともなっていました。伝説で知られる大きな石の手水鉢「霊亀石」とともに、石観音は今も観音二丁目にあります。



●力くらべに使った力石。



●きくわんのん道、の文字が。



●水門と河港は一大運河建設計画の名残り。



●鈴木商店初期の看板。女性の髪型は「203高地」。



●容器の美人マークにも歴史が。

工場進出と鈴木商店

池田菊苗博士が「味の素」を発明し、特許を得たのは、明治41年でした。商品として製造・販売を始めた味の素本舗鈴木商店の川崎工場操業開始は大正3年のことです。すでに明治製糖、東京電気、日本蓄音機商会という近代工場があり、さらに富士紡の大工場もいよいよ創業という時でした。この頃をもって、川崎近代工業史上の第一期工場群が出そろったのです。

当時は、まだ多摩川の治水もままならず、水道もなく、電力も十分でなかった時期でした。しかし、一方では臨海部の埋立調査も始まり、川崎は工業用地として注目され始めてもいたのです。維新後は、さびれて財政的にも困っていた川崎が、この時を逃さず、土地を安く提供するなど町をあげて工場誘致に力を入れたこともあって、これらの工場進出は実現したのでした。

多摩川の堤外地を整備し、工場を建設した鈴木商店。後に国際的な商品となる味の素も、一般に調味料として受け入れられるまで、「味の素は蛇の粉からつくる」といった風説に悩まされるなど、大変な苦労があったようです。

今の鈴木町の地名は、鈴木商店に由来します。

東日本最初の電車

京浜急行大師線は、大変に古い歴史をもつ電車です。「陸蒸気」の開通が

明治5年。その川崎駅から大師参詣に向かう乗客の多さに着目した何人かの資本家が集まり、「川崎電気鉄道敷設特許請願書」を政府に提出したのは明治29年でした。川崎大師へは、大かたが

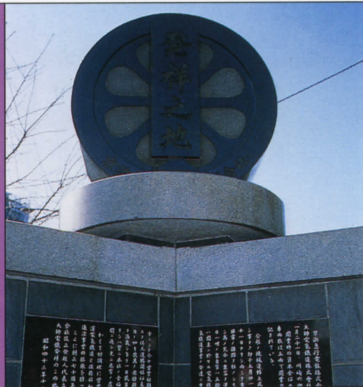
歩き、その他は人力車という時代でした。大師線の計画に対し、地元民は風致が害されることなどを理由に反対し、

さらに、百六十台もの人力車を抱える「ダルマ組」からは失業をおそれて猛烈な反対運動が起ったと記録されています。



今、川崎大師駅前には、発祥の地を記念する碑が立っていますが、六郷橋・大師停留所間に大師電気鉄道が開通したのは、明治32年正月のこと。京都、名古屋に次いで東日本最初の電車でした。

大師線は、現在の専用軌道に路線変更される昭和3年までの二十年間、路面電車として大師新道上を走ったのです。



●「発祥の地」記念碑。

- 開通時
- 運行距離 片道2キロ
- 車両 全部で5輛
- 運賃 (六郷橋～大師) 並等5錢 上等10錢
- 運転時間 9時～18時(平日) 8時～20時(日曜、祭日、毎月1日・15日・20日・21日)
- 乗客 (開通から4カ月間) 1日平均 1,224人



●桜並木をゆく大師線。単線だった頃。



●名物に旨いものあり、久寿餅。



●参道のダルマ。



●初詣の賑いは日本有数。



●大師へ向かう大名行列。

花見橋と大師新道

大師新道は、明治22年、川崎大師が土地買収などの費用を負担してつくった道路です。六郷橋畔から今の大師駅までほぼ二キロ、幅約七メートルの新道で、両側には桜の木がびっしりと植えられました。

新道がつくられた当時の多摩川には今のような堤防はなく、この道が自然堤防の役目を果たしていたのです。今もこの通りを行くと、道は周囲に比べて一段高いところを、うねりながら走っていることに気がきます。

京浜急行大師線は開通当時、この新道を走っていたのです。春ともなれば、

まさに桜のトンネルをくぐって走る電車でした。大師駅に近いあたり、堀の流れに「花見橋」という橋がかかっている、そこから眺める新道の桜は一層素晴らしく、花見の名所となっていました。その桜は、震災後に枯れてしまい、代わりに今では柳が植えられています。わずかに「花見橋」というバス停が昔の名残りを留めているにすぎません。



川崎大師と海苔づくり

川崎大師。正しくは、真言宗智山派・大本山金剛山金乗院平間寺。総本山は京都東山七条にある智積院。寺伝によれば開創は大治3(1132)年、開基は尊賢上人。境内には数々の石造物など貴重なものが多い。

一般には厄除大師として知られ、初詣の賑いは特に有名ですが、毎月二一日の縁日にも境内や参道がひととき賑わいます。参道の店先に並ぶのは、名物の久寿餅をはじめ、縁起物、ダルマ、アメ、奈良漬など。

大師地区では、門前町としての様々な生業のほか、海苔づくりが盛んでし

た。農閑期の副業が本業に変わり、戦後は浅草海苔の大半をまかになったこともあるほどです。

海苔を摘むのは冬の仕事。暗いうちから舟を出し、浜に帰ると刻んでから干す。明治から続いた海苔づくりが、埋め立てに追われ、昭和47年、百年の歴史を閉じるまで、冬の大師地区では、あちこちからトンコノ〜という海苔刻みの音が聞えてきたものでした。

●海苔づくりの道具。海苔下駄が珍しい。



●100年続いた海苔づくり。懐かしい光景。

●参考文献

川崎史話 ●小塚光治 ■多摩史談会・S37～41
 川崎市史 ●川崎市 ■同・S43
 新編武蔵風土記稿(第三巻) ■雄山閣・S45
 文化かわさき(1～6号) ●川崎市総合文化団体連絡会
 ■同・S50～55
 江戸名所図会(上巻) ■角川書店・S50
 東海道(一)(江戸時代図誌第14巻) ●大戸吉古、山口修
 ■筑摩書房・S51
 閑話雑記 ●川崎市 ■島崎文教堂・S53
 かわさき散歩 ●川崎市総合文化団体連絡会 ■同・S55
 わが町の歴史川崎 ●村上直 ■文一総合出版・S56
 神奈川ふるさと風土図 ●萩坂昇 ■有峰書店新社・S57
 東海道川崎宿 ●三輪修三 ■八雲書房・S57
 その他、各社の社史など 無断転載を禁ず



●川崎歴史ガイドのシンボル・マーク

このシンボル・マークは、古代の鏡を現わしています。歴史は私たちの祖先がつくりだしたものです。それを再び映しだすのが、川崎歴史ガイド計画です。シンボル・マークは、歴史を甦らせ、映し出す鏡です。ガイド用の“柱”の上に、それが必ずついています。 デザイン=栗津 潔

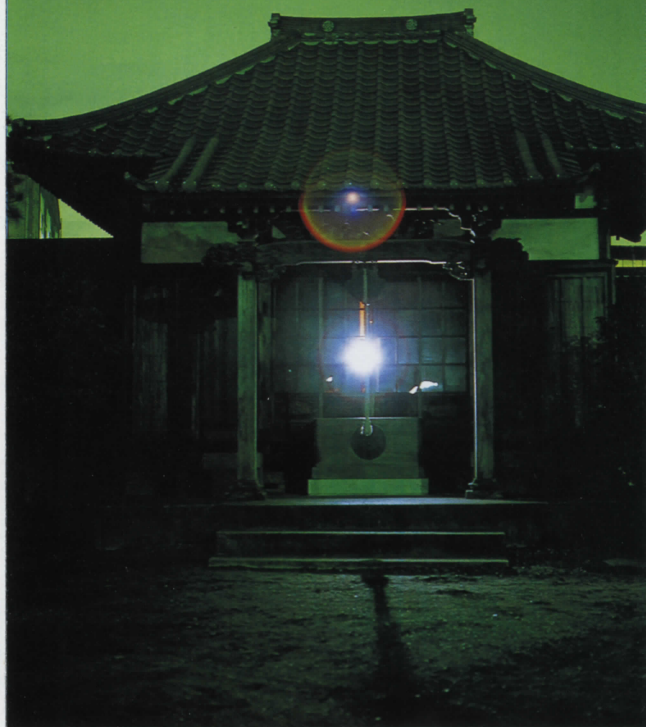


ガイドパネルデザイン=栗津 潔+清水まこと
 Design=栗津デザイン室 Photo=小池 汪

連絡先=財団法人 川崎市文化財団
 〒210-0007 川崎市川崎区駅前本町12-1 タワーリパーク3F
 ☎044-222-8821 FAX 222-8817 頒価=100円

印刷=(株)アサヒ

昭和58年3月発行
 平成14年4月増刷



●静寂の中、厳肅にすすむ節分会。

東門前駅のすぐ近くにある千蔵寺は地元では、「清宝院」とも呼ばれています。元禄以前から、ここには清宝院というお堂があり、地元民の寄合所や旅人の宿に、さらに寺子屋にも使われていました。今も境内にある大日如来は、清宝院時代からのもの。塩浜あたりで塩づくりを励んだ人々が、仕事で痛めた眼の平癒を祈願したといわれています。

とここで千蔵寺は、天保年間に東京で創建されたもので開祖は羽黒山の修験僧。明治の半ば、たまたま清宝院に逗留した住職が、こちらに寺を移したといわれています。

鬼以外の訪問はおことわりということですが、鬼以外の訪問はおことわりということ

“鬼”を祀る千蔵寺

といいます。いまだに清宝院と呼ばれているのはそのためです。

鬼面の本尊、厄神鬼王はインドに伝わる熱病除けの神、全国でも珍しいものです。本尊が“鬼”ということ、節分会の際には、「鬼は内、福は外」と豆を撒き、暗くしたお堂に世間の悪い鬼を集めて改心させ、良い鬼にして再び世間に返すという、誠に珍しい法要が行われます。ただし、この日は鬼以外の訪問はおことわりということ



川崎歴史ガイド

- | | |
|---------------|----------------|
| ① 一東海道と大師道 | ⑨ 一消えた地名 久根崎 |
| ② 一川崎宿と明治維新 | ⑩ 一医王寺と二つの伝説 |
| ③ 一宝暦十一年の大火 | ⑪ 一「鋤音」から近代工場へ |
| ④ 一新宿という町 | ⑫ 一運河と水門と港町 |
| ⑤ 一六郷の渡しと旅籠街 | ⑬ 一大師道・観音道 |
| ⑥ 一長十郎梨のふるさと | ⑭ 一工場進出と鈴木商店 |
| ⑦ 一万年横丁から大師へ | ⑮ 一東日本最初の電車 |
| ⑧ 一富士紡績と競馬場 | ⑯ 一花見橋と大師新道 |
| ⑨ 一レコード製造の始まり | ⑰ 一「鬼」を祀る千蔵寺 |

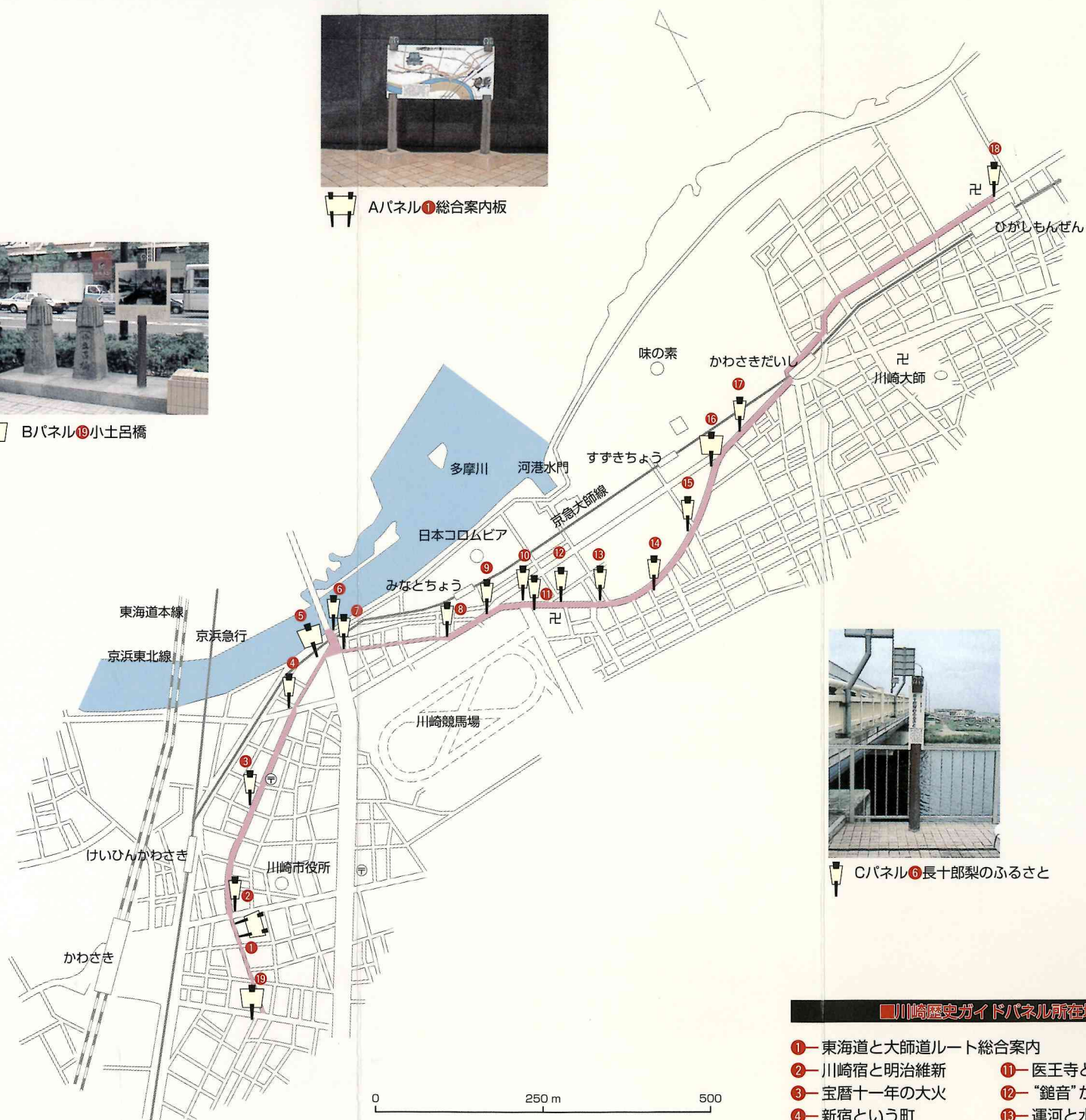
東海道と大師道ルート



Aパネル①総合案内板



Bパネル⑬小土呂橋



Cパネル⑥長十郎梨のふるさと

■川崎歴史ガイドパネル所在地

- | | |
|------------------|---------------|
| ① 東海道と大師道ルート総合案内 | ⑪ 医王寺と二つの伝説 |
| ② 川崎宿と明治維新 | ⑫ “鎌倉”から近代工場へ |
| ③ 宝暦十一年の大火 | ⑬ 運河と水門と港町 |
| ④ 新宿という町 | ⑭ 大師道・観音道 |
| ⑤ 六郷の渡しと旅籠街 | ⑮ 工場進出と鈴木商店 |
| ⑥ 長十郎梨のふるさと | ⑯ 東日本最初の電車 |
| ⑦ 万年横丁から大師へ | ⑰ 花見橋と大師新道 |
| ⑧ 富士紡績と競馬場 | ⑱ “鬼”を祀る千蔵寺 |
| ⑨ レコード製造の始まり | ⑲ 小土呂橋 |
| ⑩ 消えた地名 久根崎 | |

0 250 m 500